

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

15  
5003

引證書目

古本日本紀標注及隱義

古事記

續日本紀

日本紀畧

水鏡 日本斐釋

釋日本記

姓氏錄 令

延喜式

禁中御抄

年中行夏秘抄 或記

懷風藻 繢古今和歌集

續教訓抄 宗藤朝臣記

內宴記

古樂書二種

續教訓抄

宗藤朝臣記

平家物語

源氏物語

續古今和歌集

續教訓抄 宗藤朝臣記

細川幽斎詰書函

記者  
不知

大和名所記

記者  
不知

缺本

琉球島圖

春日權現驗記

歟福寺緣起

史記

前漢書

後漢書

魏志

晉書

隋書

三國史記

東國通鑑

事物紀原

二才圖會

卷 5  
5003

内裏時 古樂書二種 鬱林宿  
丰中日本良媒水鏡 右時 雜風範  
令 城方輪 喜左 桦中聯  
日本瑞異 水鏡 日本文獻 黑日本時  
古木日本之樂五部經 古事記 黑日本時  
周易書解

衝口發

本邦上古之世ヲ天神七代地神五代ト名テ國史  
以下ノ書ニ神代伝神武紀ニ此間ヲ一百七十九  
萬二千四百七十餘歳トス此年數固ヨリ論スル  
ニタラス天神七代ハ其名ノニメ人體ナシ地  
神五代ノ始ハ西土西漢ノ時ニアタル其說如何  
トナレハ辰韓ハ秦ノ亡人東國通鑑云辰韓在馬  
韓之東自言秦之亡人避侵入韓々割東界以与之立城柵言語有類秦人或謂之秦韓常用馬韓人作主雖世々相兼而不得自立明其流移之人常制於馬韓地宜五穀俗饒蠶業善作綿布來駕牛馬嫁娶礼俗男女有別行者相逢皆讓路駐ニメ素夷雄尊ハ辰韓ノ主也姓氏錄右京皇別新良貴

彦波激武鷗鴟草葺不合尊男稻飯金之後也是出見○新良國王稻飯金出新羅國王者祖合日本紀居西于辰言王或云呼貴人之称也次々雄者一次々雄或云慈充方言巫蓋神而敬畏之称也按次々雄ハ昂素斐雄也古音相通ス然ハ則新羅ノ君長明白也神武帝ノ辛酉元年ハ周惠王十七年ニアタル

ツ周惠王ノ時何ソ辰馬ノ二韓アラムヤ五代ノ間ノ年數知ベカラズトイヘ丘大己貴命ハ素斐雄尊ノ子ニメ其子事代主命ノ女姫蹈鞴五十鈴姫命神武帝ノ后ナレバ其大概察スベシ竊按ニ神武帝元年辛酉ハ後漢宣帝神爵二年辛酉ニメ宗神帝廿八年辛酉ナラン然レハ周惠王十七年

辛酉ヨリハ六百年後也此ノ如ク六百年減セサレハ三國ノ年紀符合セス如此新キノ故史記ニモ朝鮮傳ハアレニ日本傳ハナレ漢書ニモナシ

### 皇統

或記云神武天皇御母ハ玉依姫葺不合尊ノ御子ミハエシテサス御年モ葺不合尊ヨリハ長シ玉ヘリ其先ハ吳ノ泰伯ノ苗裔ヨリ出サセ玉フ畧後ニリ南海ヲ凌キ大倭國ニ饒速日命長都ヲ開玉ヘリサレハ後ノ世ニ我邦ハ太伯ノ末ト云又周ハ姫姓ナレハトテ姫氏國ノ

名モアリ中然氏神武天皇御末ハ仲哀天皇ニテ  
盡サセ玉フ下畧按年中行事秘抄等ニ載ル說モ何  
トヤラム事有ゲナリ此等ノ說ハ皆本拠アリシ  
トトミユ又吳ヘハ後々一テモ通じス此モ一證  
トスヘキ故但神武帝御裔仲哀帝ニ盡云應神帝  
ハ何クヨリ出サセ玉フヤ胎中天皇イロ／＼疑  
シク思ハル、也又按ニ神武帝ヨリ仲哀帝至リ  
上加茂ニ祭ラレ痘神帝ヨリハ其端改リテハ幡  
ニ祭ラル、返ニイフカシ○神武帝ノ御事右ノ  
如クニ其勃興シ玉フ地名蠹魚ニ破ラレ書ノ考

ベキナシ按ニ御母玉依姫、海宮豊玉彦ノ女ニメ  
豊玉姫ノ妹也塩土老翁ノ計ヒニテ彦火ミ出見  
尊ヲ海宮ニ移シカクス内豊玉姫ヲ娶テ嘗不合  
尊生レ玉ヘリ此海宮伝ハ琉球ノ惠平也島ヲ云  
惠平也或惠平屋ニ作ル廣輿圖及使琉球錄所謂  
惠壁山閨書及傳信錄葉壁山ニ作ル又傳信錄作  
伊平屋島續文獻通考所謂琉球北山 惠平也島ハ天見島日本紀ニ  
又阿麻美菴美ニ作リ続日本紀ニ奄美ニ作ル嶋  
ノ東北ニ山アリコレヲ天孫嶽ト云土人云此山  
上古神人ノ降臨ノ地故ニ島ノ名トスト神人ノ  
降臨伝ハ則彦火ミ出見尊ノ御事ニテ日本紀ホ

ニ天孫ト称ス此ニ依テ天孫嶽阿麻羨島芋ノ名  
アリサレハ王依姫ハ此島ノ豊玉彦ノ女ニメ太  
伯ノ裔此嶋ニ渡リ王依姫ヲ娶テ神武帝生レ王  
ニ神武帝ハ即此島ニメ倭國芋ノ事ヲ知レメシ  
勃興シ王フナラン因テ按ニ太伯季歴ニ避テ勾  
吳ニユキ断髪文身以テ龍子ニ象リ蛟龍ノ患ヲ  
避ト此ス十八千太伯ニ始ニアラス吳越ノ古俗  
也三才図會云有大琉球小琉球各出名王異寶其  
國福建泉州東其人深目長鼻頗類婦人男子去鬚  
黥于手以羽毛爲冠粧以珠玉女人以墨黥首爲龍

蛇文皆紵繩纏髮以白布羅紋爲帽維毛爲衣ト其  
古俗ヲ記ス右ノ如ク黥龍蛇ノ文ヲナス勾吳ノ  
俗ニ同ケレハ勾吳ノ人琉球ニ入テウツル風俗  
ナルノ知ヘシ日本变釋ニヨレハ本邦モト文身  
ノ國ナレハ神武帝東征ノ後其人入来テ其俗ノ  
ウツルモノナラム惠平也島中山ノ西北  
三十里周廻二十六町

景行紀二十七年二月武内宿禰自東國還二十七年  
七月遣武内宿禰令察北  
陸及東方諸國之地形奏言東夷之中有日高  
見國其國人男女並推結文身爲人勇悍是日高  
蝦夷亦土地沃壤而曠轄可取也推結文身后世

文身ヲ止メラレシヨリ書タル文ナリ古来ハ  
皆文身也變釋及後漢書ホニ考テセルヘシ文  
身ノ俗蝦夷ニノミ残リタル也

言語

本邦ノ言語音訓共ニ異邦ヨリ移リ來者也和訓  
ニハ種々ノ說アレモ十二八九ハ上古ノ韓音韓  
語或ハ西土ノ音ノ轉スル者也

伊弉諾 伊弉冉 古本日本紀傍註云伊弉神代  
王之稱諾男也冊女也按伊弉疑韓古語居西干ニメ  
遠之干ト音通ナラム諾及冊  
韓古音

素戔雄 新羅本史所謂次ノ雄也次ノ雄或作慈  
充方言巫蓋神而敬畏之称也

忍穗耳

古本日本紀假名ヲシホニ

新羅本史所謂居西干

瓊々杵

新羅本史所謂尼師今

大己貴

韓所謂臣智言諸邑渠帥

神籬

古本日本紀隱義云神籬新羅語也說見祭  
祀条

右ノ外姓氏ノ条ニ一二ヲ記ス

千座置戶

古本日本紀隱義云新羅古語刑之名也

天ノ陰

陽

河カア

島セ

殿トヲ

屋ア

娘テウ

人シヌ

男キヤ

女キ

子コ

孫ニ

熊ク

鐘

上 カモ

下 シモ

内 ソク

外 トウ

大 ヨリ

小 ヨリ

寢

子

越 コツ

川 ツ

止 ト

墓 ハタケ

豈 アニ

郡 コム

右韓音諸書ニ散在スル者今其一二ヲ記ス  
地 蟬 蜂 蟬 菊 死 推

右西土ノ音ノ下、和訓トスル者

花

ナ

魚

ナ

瓦

カハラ

土器

カハラ

郭公

ホト

稼

カレラ

乳母

タマ

皿

サラ

右ノ類ハ竺語也

古昔秦人及吳人入來レ故其音傳リ秦人ノ言語  
韓ニ一変シ又此邦ニ一変シ今此ヲ求ルニ和訓

混ノ分別シカタシ吳音ハ和語ニ混セサレハ  
明白ニ此邦ノ音トナリ漢吳二音相混セス並ニ  
行ル漢音ノ始何世ノ事ナルトヲシラス察スル  
ニ遣唐使ノ道ヒラケテヨリノフナラム又對馬音  
アリ其由来種々ノ說アレニ信用シカタシ吳音  
伝ハ勿論非也固ヨリ韓ノ古音ニモアラス給ヲコ  
ウ大ヲテエノ類也○按ニ蝦夷夫ホク婦ミチ○按ニハツ  
老ル風ルウ此皆韓ノ古音ヨリ轉ル者

姓氏

國朝諸姓其元三韓ノ官名及其言語ニ出ルモノ

多シ此亦上古此邦ニテモ韓ノ官職ヲ用ルノ一  
證トスヘシ天智帝御宇唐風ヲ以韓制ヲ止メ  
王ニテ其事傳ラス天武帝御宇萬姓ヲ改メ混シ  
玉シ其文字ヲカヘラレ今ノ如クナリタリトミエ今  
諸書ニ散見スルモノ一二ヲ举ク尚博古ノ和学  
者ニ問ルヘシ○後漢書辰韓傳云諸小別邑各有  
渠帥大者名臣智次有儉側次有樊祗祗或作瀛次有殺  
奚次有邑借皆其官名○東國通鑑同之

臣智

臣朝臣見下文

險側

縣主

樊祗

直

殺奚

佐伯

日本紀景行五十一年有者國佐伯可以爲  
一證

邑借

連

朝臣

直

殺云帝王相親之詞也言我身隨添之  
臣也

○幹按ニ元臣智ヨリ來ル者訓ハ吾ニ隨ヒソ  
フノ意ナレ凡文字ハ朝ニ在テ親ニ朝臣トイニ疎

ニ臣伝

宿祢 秽云昔称皇子爲大兄又称近臣爲少兄

宿祢之義取於少兄也

按隋書高麗傳云其官有大々兄次大兄次小兄

又釈云或說帝王相親云曾古尔祿与  
真人 辰韓所謂麻立干也 麻立干ハ新羅ノ王  
号ナルヲ以本邦皇別ノ姓トス

首 韓語ノ大从也 私記云於比止

造 御奴

史 文人

村主及忌寸未考

### 國號

日本ノ號西土ノ書ニ考ルニ唐以前ノ書ニ見アタラス

按ニ東國通鑑新羅文武王十一年八月倭國更号  
日本自言近日所出以爲名文武王十一年ハ天智  
帝九年ニメ唐高宗咸亨元年ニ當ル日本紀ヲ始  
メ上古日本ノ字ヲ用ルハ皆追記ナルヲ知ヘレ○倭  
大倭大和養德皆ヤ下ト、訓ス大ノ字ヲ加テオ、ヤ下  
ト云ハ大ハ羨称ノミ別ニ意義ナレ又ヤ下トノ訓種  
種ノ說アレ丘信シカタシ養德ト書シヨリ考レハヤ  
下トハ倭奴ノ轉語ナルヲ必セリ又此國ノ惣名ヲヤ  
ベト、云ハ元ハ一國ノ名ナレ丘神武帝以來歴世都  
スル國ナレハソレカニロカリテ全体ノ名ニナリタル也

後ニ大和日本ト字ヲカヘテ大和ハ一國ノ名日本  
ハ六十余國ノ惣名トスルモノニ木アルヲ以木ノ  
國火アルヲ以火國ノ類ハ古カルヘシ其餘國号古書ニ  
ニ卫タルハ後世名ケテ追記シタルモノニ始ヨリ此  
名アルニアラス

按伊弉イサワ 忍穗アシダ 共居西干ノ轉スルモノ也 伊勢又  
同ク居西干ノ轉語ナ云日本紀ニ伊卉ト書タル  
ニテモ知ヘシサレハ伊勢ハ天照太神ノ御國伝ニ  
テ磯邊モ居西干邊十ラム

神璽

國朝神璽ト称スルニ三アリ一ハ禁中御抄ニエタル  
神璽一ハ神祇令古語拾遺等ニ所謂鏡劍ヲサシテ  
云美称一ハ公式令ノ天子神璽本注云謂蹟跡之  
日壽璽寶ヨコトノミニルト 而不用内印方三寸外印方二寸五分云々  
諸司ノ印ニテノ製ヲ載テ此神璽ハ印章ヲ指テ云々

按日本紀允恭帝元年璽符云々繼體元年天子鏡劍璽。  
符云々舒明天皇之璽印云々孝德元年授璽綬。  
禪位云々璽符璽印璽綬皆印章ナル云々明白也異邦ノ  
文字ヲ假リテ書タルモノトイ云々此名目應神帝以  
前ハナシ疑ハ此即公式令ニ所謂寶而不用所ノ印

聖ナルツルヘレ

年號

年號大寶ヲ始トス此ヨリ前孝德帝大化孝德帝ノ時  
始テ唐礼ヲ用ルノハレヒラケタリ年号ハ西土ノフナハ古代ノ年号ヲ皆ケツリテ大化ヲ始スルナリ天武帝ノ白鳳アレニ連綿セサル故ニ大宝ヲ始トス云按此ノ大化白雉等ノ外ニ俗ニ異年號ト覺タル年号アリ斯謂孝靈帝ノ列滴○應神帝ノ垂至○武烈帝ノ善紀正和五年定居年○繼休帝ノ殷到按繞教訓抄継休  
亥ヲ以教到元年トシ宣和帝ノ即位丙辰ヲ安閑帝ノ号トス帝即位廿五年辛未ニシテ宣化帝僧聽欽明帝師安年大長三年法靖四年○靖兄亦一作清

一年明要三歲和一年和知僧一貴樂十八年○貴  
一作遺金光年○敏達帝貞棲五年○棲鏡常一作傳四年○鏡勝照  
一作鍾年○用明帝和重二崇峻帝端政五年○推古帝喜樂瑞正始哭格一法興七年○吉貴非是一作法與願轉四年光元六年○光一和京五年○一作弘作和景繩仁王六年節中年○舒明帝聖聽三年○一作聖德一僧要五年○一作安要命長五年○一作長命一○天智帝中元四年○戊辰為元年一為六年然則六年壬申可係大友天皇○天武帝白鳳年景安朱雀年○持統帝大和年○文武帝大長三年○戊戌為元年此號其義解スカラサルモノ多シ竊按三應神帝至ノ号八神功皇后攝改四十年庚申

魏正始元年 魏親魏倭王ノ印ヲ贈ル若ケ様ノノミ依テ号クル辛伊豫道後湯碍云法奥六年推古即位四年丙辰ヲ元年トス此年法真寺落成ス此ヲ以名ワクルナラン白鳳朱雀続日本紀朱雀ハ水鏡ニモアリ金光ハ平家物語大長延暦中ノ鮮文ニ出等ノ號修史ノ日削テ載ス

### 容飾

上世文身黒齒被髮ス後漢書倭人傳男子皆黥面文身以其文左右大小別尊卑之走○三韓傳馬韓其南界近倭亦有文身者○日本支那云元文身垂髮黑齒也近江朝天下庶人令結髮止黑齒也○按隋書日本傳文身ノノナシ此ヲ止ルノ曰タリ蝦夷俗今猶然

リ此即上古ノ遺風ナリ先王世々夏ヲ以夷ヲ變シ玉フ文身何ノ時ニ禁セラレシヲシラス履中紀ニヨレハ應神仁德ノ朝ニ止メラレシナラン黒齒ハ近江朝庭トメラレシト也变秋ニニ卫タリ被髮日本紀天武十一年禁セラレシトアリ推古帝御宇冠位ヲ定ム官階アルハ此時ヨリ束髮セシナラム变釋ニヨレハ此モ近江朝ニ止メラレシトナリ然レハ天智帝カ大友皇子ノ制ナルヘシ仍テ日本紀ニ天武帝ノ制トスルナラム四十已上ノ婦ハ髮ノ結不結其意ニ任セ巫祝ノ類結髮ノ例ニアラス云ハ察スルニ

天武帝ノ制ナルヘシ其後慶雲二年十二月ニ再  
ヒ詔制アリテイヨク止メラレ神祇ノ事ニアツカル人  
ノミ被髮セシメ相混セサラシメラル一快事ナラス  
ヤ結髮ノ体古西ニ散在ス其後男女復齒ヲ染メ  
婦女被髮ス何ノ時ニ始ルヲシラス竊按ニ弘仁  
以後ノ制ナルト必セリ

貴族ノ男子元服ノ日ヨリ女子貴賤トナク婦ヲ  
許メ黒齒セシメ童男及ヒ婦女少長トナク被  
髮セシメ俗云スペラカン  
サケカミノ類貴族ノ男子元服十八歳ニ  
至リ婦女貴賤トナク十三歳已上眉ヲ刺テ墨ヲ

以テ眉ヲヒク何レノ氏ニ始ルヲシラス又ヒニブク  
ラナス固ヨリ皆夷俗ナリ ○男子頂ヲ刺リ髮  
ヲ後ニ束ヌ後世ノ俗此ヲ元服伝蒙古韓靼ノ  
開刺ト一間ノミ然ルニステニ春日權現驗記西所  
画兼  
預隆ニ見タレ六百年前ヨリモ有シアナム固ヨリ  
武夫ノヘテ文人ハシカラス今ノ婦女髮ヲ束ル其  
形大異同アレヒ唐朝ノ遺風ナリ中古被髮ヲ禁  
メ結束セシムル体ニ天淵ナラス大愛スヘシ後世  
ノ俗ニアラス

衣服

上古衣服タゞ千早アルノミ日本紀ニ神代ヨリ衣  
裳ノアアルハ固ヨリ異邦ノ服ノミ千早ノ制表一條ノ  
布ヲ用此ヲ着スル其一條横幅ノ中間ヲ裂テ頭  
ヲ出シ其両端ヲ以結束ス日本變釋ニ中衣伝是  
ナリ小野ノ妹子入隋ニモ此ヲ著シ行シトニ至リ後  
西土ニ倣テ服ヲ製表メ巫祝ノミ此ヲ服上ニ加フ  
又巫祝ニアラストイヘ神会葬送等ニハ故事ヲ存  
メ卑賤ハ此ヲ服上ニ加ヘシム是巫祝ヲノ黒齒被髮  
セシムルカ如レ按三國志已人倭人傳ニ千早ノ外ニ又別ニ婦女ノ服アリ其制今知ヘカラヌ疑クハ筑後

磐井造ル所ノ千早ノ制及着用ノ法古図書ニ考テ  
古人服ノ類ナシ  
左ニ岡ス墓ヲオサムル人ナ早ヲ著タル人アリ其体魏志後漢書晋書等ニ云所ノ如シ今諸祠神会ニ千早ヲ淨衣或ハ黄衣上ニ加テ是ヲ後ニ曳ハ着法ヲ失スル故ナリ

千早制 有長短二様

興

十

後

兵士一ニ尺餘許

曲尺下倣之

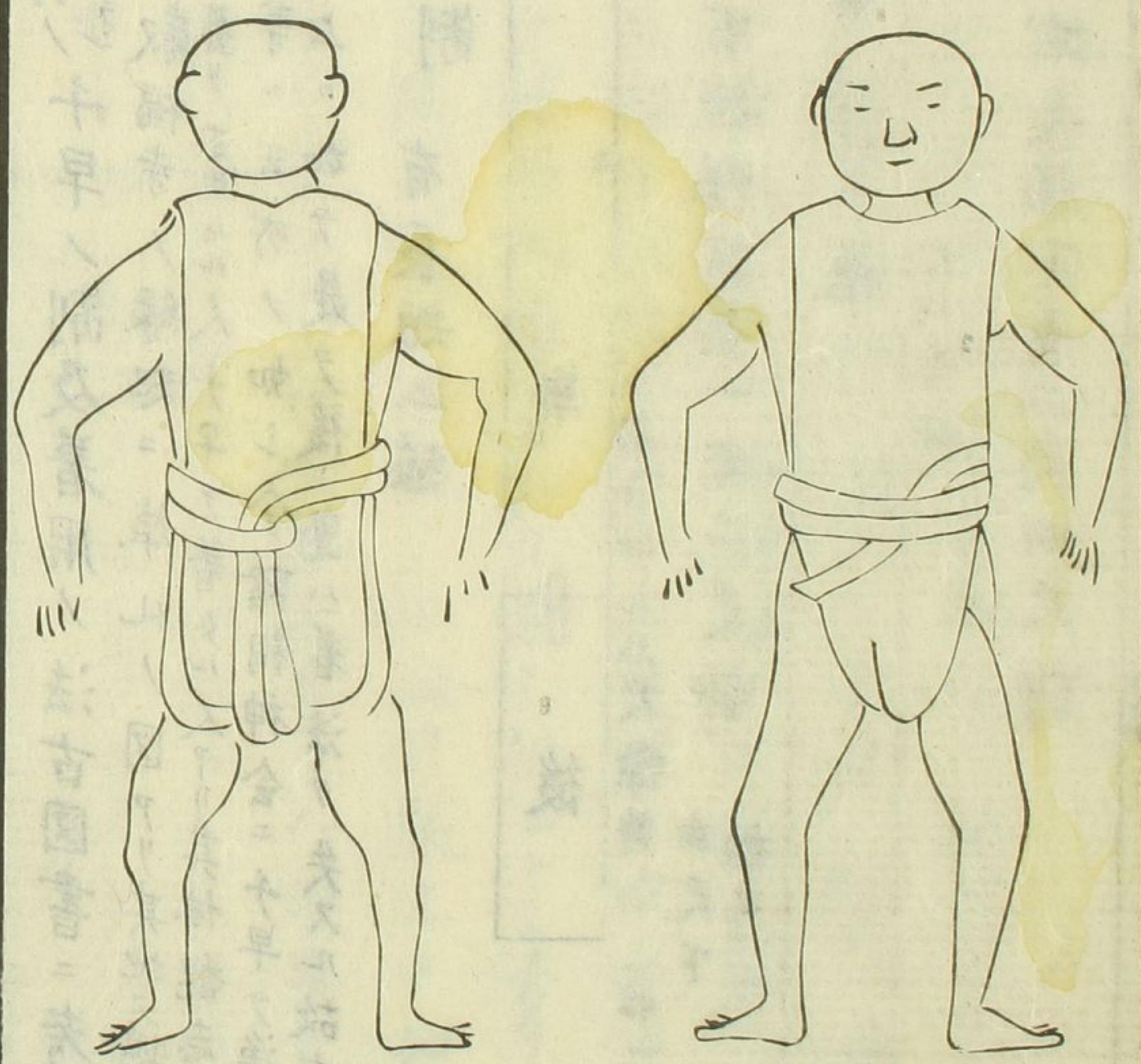
右短様布長一丈二尺許

興十後  
一丈八尺許

右長様布長二丈四尺許

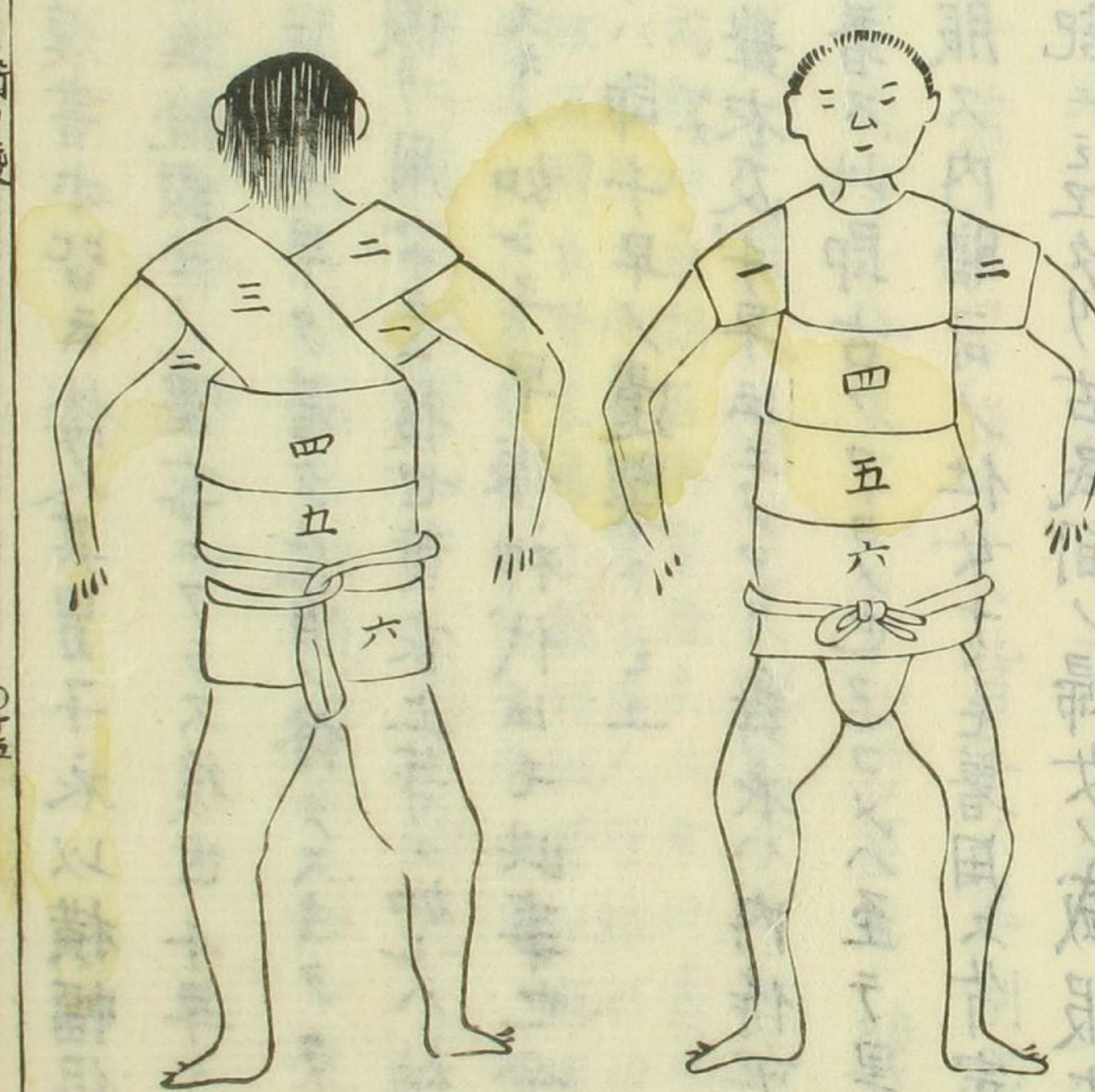
前

後



前

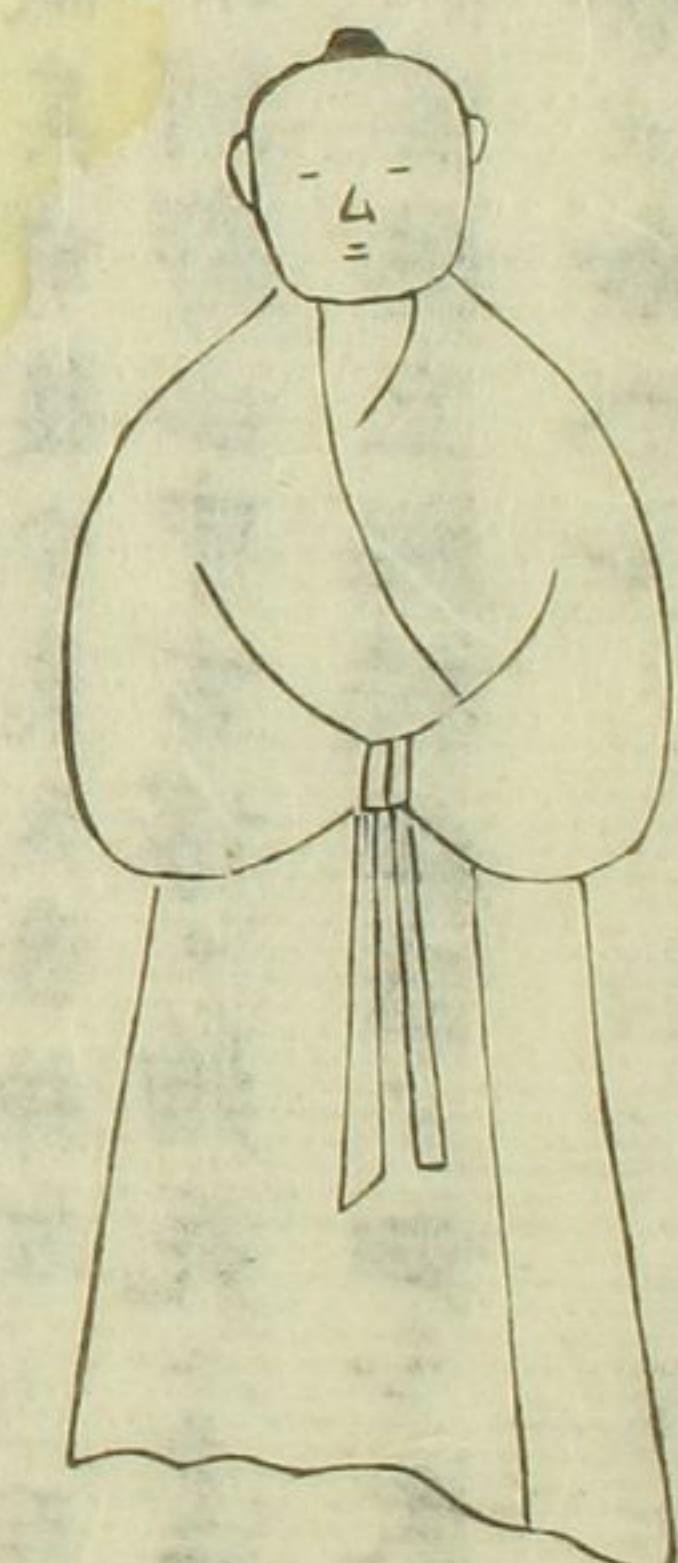
後



魏志及後漢書ホ皆云倭人其男子衣以横幅但結束相連畧無縫綴モノ嚙寢ニアラス後世 千早ニ祥  
裨ノ字ヲ用ユ千早ヲ著タル肖ノ体タスキヲカケタ  
ル如キ故ニ假リ用ルナム後世黄衣上等ニ加レハ袖ヲ  
カケテタスキノ如シ千早振神代云モ此事也今俗  
ニ用下帶ハ即千早ノ遺製トニユ

今巫女舞衣及チ早伝モノアリ舞衣ハ内侍所ノ  
刀自モ著ス此即古ノアコメ也アコメハ至テ卑賤  
ノ者モ服ス内膳司ノ仕女ナトモ著用スルノ宗藤  
朝臣ノ記ニミ卫タリ古民間ノ婦女ノ盛服ナリ

俗ニ此ヲ千早伝ハ大ナル誤ナリ又今ノ巫女ノ右ノ  
舞衣ノ上ニ着メアコメ伝モノハ背子ノ異制也  
應神帝御宇縫女二人貞セシヨリ始君臣氏ニ韓衣  
ヲ著タリシカレ由庚人ニ至リテハ裸形ナリレトワ  
日本史尺云應神帝朝百濟貞縫衣ニ女曰真毛津始習縫補君臣之間終着韓衣庚人皆裸形但依百濟人貞雖有韓衣并棄帛之類時收禁中府庫內藏是也終着中衣蔽其前後○史云應神以百濟人參來是河内國石河郡山中古塚ニ殉死ニカユハ土物一枚ヲ堀出ス其体左袴挾袖左ノ如シ天智朝已前ノ物タル察メ知ヘシ

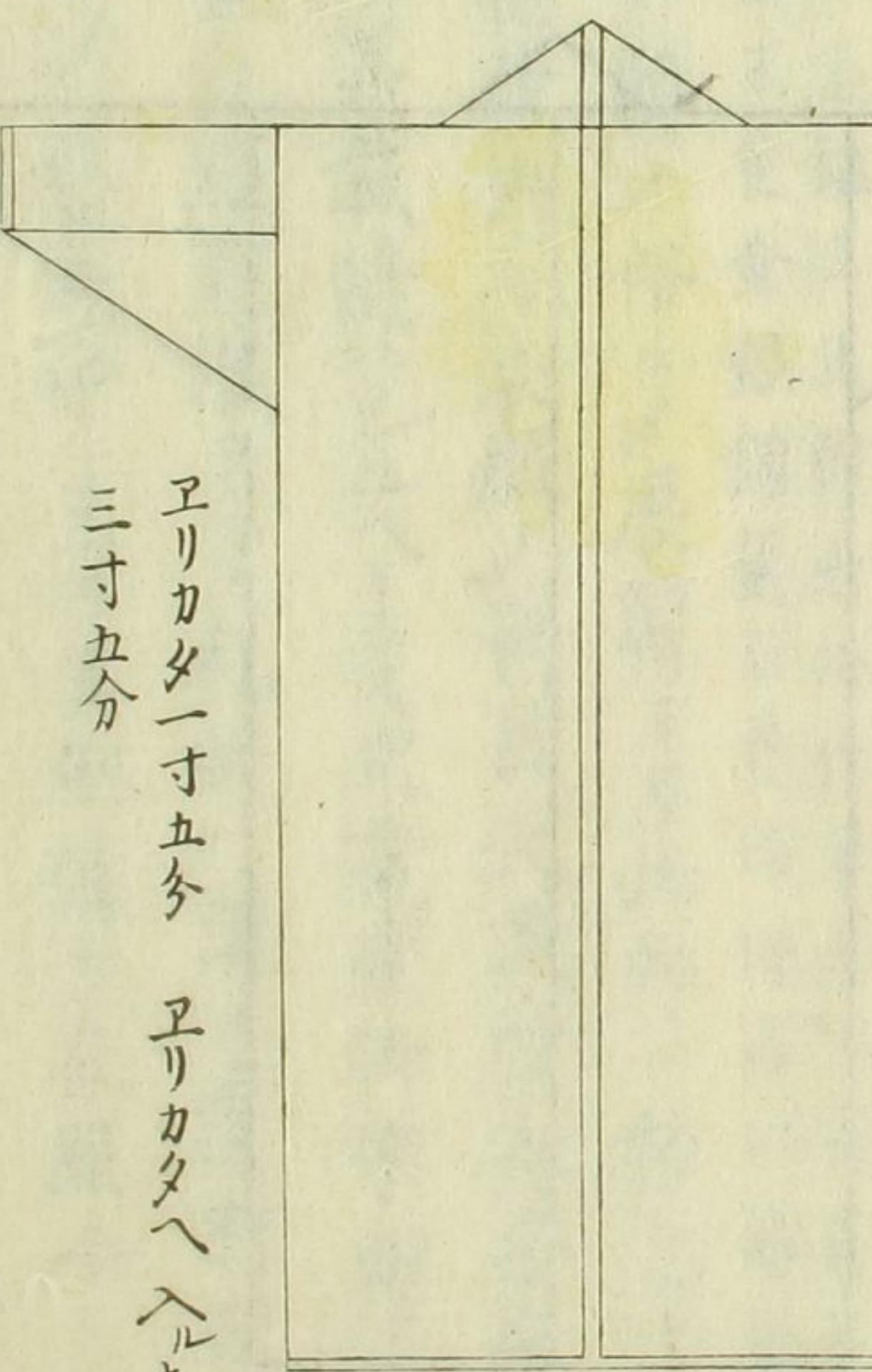


此埴物ヲ以テ考レハ裁縫韓服ナル知ヘシ  
蝦夷服即韓制ノ遺制ナルト知ヘシ今ノ

○  
○ナセ

蝦夷エリ及ヨクビ  
ナシ  
長三尺七寸許 肩行一尺六寸  
袖下一尺二寸 袖口四寸

右曲尺



前

此ヲ服スレハ右埴物ノ形ノ如シ

○ 衡口幾

○ナセ

後

韓東

ナリ

古曲文

跡下ニテノト

跡ロ

身ミスナレ

身ノ

文六七

上古男女首飾アリ日本紀ニ以八坂瓊之五百箇  
御統纏其鬢鬘及腕又婦女ノ手腕ヲ飾ルト後々  
テモ見タリタヲヤメノ手ニ巻玉ノ緒ヲヨハミナト歌  
ニモアリ東國通鑑云馬韓居處作草屋土室其戶向  
耳其男子衣上俗不重金銀錦罽而貴瑣珠用以飾髮座  
帛袍履草蹠韓ノ俗ニメ辰韓ヨリ此邦ニ移ヒルナリ  
日本紀孝德帝御宇衣服ノ色目天武帝御宇衣服  
ノヲニユレ凡其裁縫ハシルヘカラス文武帝御宇始テ制  
衣冠司ヲ置礼服朝服アリ礼服ハ漢ノ遺制朝服  
李唐ノ制ニメ養老中ニ至リ其制備リ衣服令ニ委  
シ朝廷ハ貴賤トナク左社ヲ改ラレシカニ庶民猶尤

祉ナリシヲ舍人親王知太政官事ノ時右祉ニ改メラレシト續日本紀ニミ正タリ當時ノ庶人ノ服ノ韓服トニ立タリ

按位袍缺腋古ニ縫腋ハ後也缺腋ハ隋ノ襍子ノ裁縫ニミ李唐此ヲ用テ位袍トス綾緞布帛ト染采長短ヲ以貴賤ヲ分ツノミ裁縫天子ヨリ庶人達ス本邦始此ヲ用ユ後世内宴ノ日天子猶缺腋ヲ著御レ玉フ一證トスヘシ私ノ小忌淨衣狩衣褐衣白丁退紅ノ數童直衣細長モ皆襍子ノ製也但綾緞布帛染采ノ差別アルノミ○日本紀畧曰

弘仁九年三月有詔天下儀式男女衣服皆依唐法此文ニヨレ韓制ノ服也コレリトニユ○唐太宗衣服ニ夏冬ヲ別テリ本邦コレニ依テ夏冬ヲ分ツフハ承和中ニ始ル

祭服古昔韓服ナルト察メ知ヘシ大宝以来唐制ニヨリテ大祭礼服ヲ用弘仁中大小諸神祭及季冬奉幣諸陵帛衣ト格改リテ復韓制ニ本ケリ韓帛衣ヲ用上見ニシカレヒ諸陵ヲ神祭ト同ク穢トセサルノミ後世ニサレリ年中行事秘抄云天安二年十二月限定十陵四墓年终献荷前幣使分不攝念漏小浴可宜云雖似神事頗涉不净仍不行他神事冠ニ日薦及心善ホヲ著此

時古ニ復スルヲトニユ

喪葬

本邦上古喪制ナシ固ヨリ服制モナシ大寶ノ制令ニ始ルナラム然ニ大宝令傳ラサレハ其制考ヘカラス養老制令ノ日固ヨリ大宝令ニヨルヲ必セリ然レニ喪アル者ヲ穢トスルヲキカス

後世死ヲ以穢アリト云埋葬ノ事モ皆穢トス上古ハシカラス墓ヲ以祠トメ別ニ祠ヲ立ルヲナレ花巖ニ年々幡歌舞ヲ以祭リ三諸山後世ニ至リテモ山ヲ以社トシ又神体トスル俗ニモ覺ヘタリ三諸山ハ

即墓也其祭祀皆墓ニ供メ穢トスルヲナシ歷世皆此ノ如レ諸陵雜事著ニ考テモ知ヘレ故ニ中古猶上古ノ形ヲ存メ祭礼千早ヲ服レ葬礼又千早ヲ著ス此ニテモ其一端ヲミルヘシ○山陵ノ制上古皆山ヲ用中古多ク石窟ヲ用ユ南面華表ヲ立○諸臣已下ノ墓多ク丘陵ニヨリテ制ス前面多クハ 華表ヲ立後世祠ヲ建ル前面華表ヲ建ハ皆墓ノ制也○死ヲ以穢トシ喪アル人ヲ穢トシ墓ヲ穢トスルヲ寂澄空海ヨリ始ルナラム佛家ノ說也真言宗牌位ヲモ穢物トメ佛像ト同所ニ置ズ墓ヲ穢トメ則其人

ノ手澤ノ物ヲ埋テ別墓ヲ立清墓ト称ス天台真言  
共ニ祈禱ノ慶ニ服者ヲ忌テ遠ク

### 祭祀

上古祠ヲ立ズ其祭ルノ墓所柩前ニ於テス爰ヲ  
以伊弉冊尊ノ陵前三幡歌舞ヲ以祭リ天照大神梭  
ヲ以身ヲ傷崩シ玉石窟陵也ノ前ニ於テ天鈿女第纏ノ  
絆ヲ持テ俳優ヲナス此亦辰韓ヨリ傳ル巫ノメ神  
ヲ祭ラレムル古俗ナリ允恭帝四十二年正月帝崩  
新羅王聞天皇既崩驚愁貢上調船八十艘及種々  
樂人八十是泊對馬而大哭到到筑紫亦大哭泊干

難波津則皆素服捧御綱且張種々樂罟自難波至  
于京或哭泣或歌舞遂參會於殯宮也新羅於テモ  
古俗ノ傳ル此ノ如レ此ノ外ニ古代祭祀ノ法ナシ

日本紀卷第二云高皇產靈尊因敕曰吾則起樹天  
津神籬及天津磐境當爲吾孫奉齋汝天兒屋命天  
太玉命宜持天津神籬降於草原中國亦爲吾孫奉  
齋焉乃使二神陪從天忍穗耳尊以降之是時天照  
太神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此  
寶鏡當猶視吾可與同牀共殿以爲齋鏡復敕天兒  
屋命太玉命惟爾二神亦同侍殿內善爲防護○神

○離ハ後世ノ神祠也何ニテモ其人ノ体トメ祭ル主ヲ藏ル  
物也此ヲ比毛呂岐ト訓スルハ元新羅ノ辞ニシレヲ  
假テ用ルモノ之殯斂韓音比毛呂岐也儉側ヲ縣主  
ト書カヘテアカタヌシ伝カ如レタトハ鏡ヲ鑄テ此ヲ其  
人ノ体トシ常ニ殯ニ侍スル如ク供奉スルヨリ假リ用タ  
ル辭也天日槍カ携來然神羅モ日槍カ父祖ノ主ナルト  
知ヘシ○磐境ハ墓ヲ云也其意ハ屍ヲ理葬シタルハ  
再ヒカヘリ来ラサルト磐石ノ相フサカリテ往來ノ境ヲ  
隔テタルカ如キヨリ磐境ノ字ヲ假リ用テイハサカト訓ス  
磐境ノ字ノ音即彼安加ナレハ又終ニ墓ノ字ノ訓

トナレリ磐戸伝モ同意ナリ此說ヲ以テ右ノ日本紀ノ  
文ヲニシハヨクスムトニ天照太神崩御ノ後御形ノ鏡  
ヲ鑄テ神羅ヲ設テ同殿ニ祭リ奉リ御陵ニ其祭ヲ  
奉ルトヲ記ス也

○天照太神御陵日本紀以下ノ書ニミエス按ニ當時  
天照太神皇居大和國高市郡ニアルト日本紀ニ依テ  
知ヘシ然レハ其崩御ノ後葬奉ル他國ニアラサルト知  
ヘシ和州各區ヲ記シタルモノニ天香山ノ下ニ天香山或ハ  
天香來山天香薰山天香久山天隱山ナト書リ香山  
香久山香來山ハ所出多シ香薰山隱山ハ所出慥ニ覺ヘ

侍ラス然レニ其出所アリテ記スモノナラム夫天香山ハ  
高メ天ノ香來云ヨリ名ル伝固ヨリ論スルニ足ラス天隱  
山ト書ニヨレハ隱山ニテ天ノ香山ト畧レ文字モ障十キ  
字ニカヘシモノナラム天ノカクノ山ナレハ天照太神ノ御陵  
タルト知ヘシ続古今和歌集ニ天クタル神ノカコ山今レモソ  
君カタメニトミルソカシユキ為家々此歌モ思ヒ合スヘ  
レ上古事アレハ天香山ニ祈ル爰ヲ以神武紀ニ此土ヲ  
以祭罣ヲ製レ崇神紀埴安彦妻吾田此山ノ土ヲ  
以倭國ノ物寔トス此皆天神ニ祈リ奉ル意也又古事  
記ニトスルニ天香山ノ婆々迦ノ木ヲトル此モ天照太神

ニ祈リ奉ル意ヲ以他所ノ木ヲ用ス香山ノ木ヲ用ルフナリ  
墓古語ハアカナレハ婆々迦ノ木ハ墓ノ木ニテ天照太神  
御墓ノ木伝トシ固ヨリ朱櫻ニカキルヘカラス延喜式年  
中御ト料  
婆波加木皮仰大和國右  
封社令採進其處可考

拍手

拍手メ拜スル上古ノ俗也持統帝即位日公卿百寮  
羅列迺拜拍手斯朝賀節會等ニモ毎く拍手メ拜セシ  
ト也後世節會ノ日蕃客アレハ拍手ヲ止メラレシトセ  
若韓俗ナル故ニ止メラル、カ所考ヘシ後ニ神拜ニノミ  
残テ今ノ人ハ往々神ヲ拜スルノ礼ト心得アリ魏志倭  
人傳云

見大人所敬但搏手以当跪拜○集韻  
云今倭人拜以两手相擊蓋古之遺法

和歌

夫和歌ハ素戔雄尊ノハ雲ノ詠ヲ始トス御孫瓊々杵  
尊御曾孫彦火々出見尊皆ヨク詠シ玉ヘリ爰ヲ以神  
代ヨリ傳ル道伝其御製皆神代卷ニ哉ラレタリ神武  
帝ヨリ仲哀帝比テハ三十一字ノ歌至テスクナレ應神  
帝ノ御宇百濟ノ仁来リ難波津ノ歌ヲヨメリ此歌  
三十一字ノロ調ハ雲已下ノ神詠ニ類ス此ヨリ相繼テ  
三十一字ノミナラス日本紀ニモ歌多クアリサレハ王仁ノ  
難波津ノ歌ハ寔ニ神代已來ノ再唱ト云ヘシ按ニ八雲ノ

詠素戔雄尊ノ御詞ナレハ三十一字也ニ辰韓ノ辞  
ナルト知ヘシ又ハ雲立出雲モ素戔雄尊ノ名ケラレシ  
ナラム王仁難波津ノ歌モ此ニ同ク難波津ニ云ハ何モ  
セヨ此邦ノ地名也咲ヤ此花已下ハ皆百濟ノ詞ナル  
ト知ヘシサレハ文字ノ多寡ニヨラス歌ハ韓ノ古俗ナルト  
明ナリ天智帝モ歌ヲアソハシタレニ此御宇ヨリ唐風ヲ  
以テ韓俗ヲシリシケ王ヒ大友皇子ヨリ詩賦奥ヨリ詩  
歌并ヒ行レタリサレハ光孝帝ノ比ニテハ歌ハ詩ホトニ  
ハ好ニサリシトニ卫タリ禁中御抄ニ和歌ハ自光孝  
天皇未絶雖爲詩从系語我習俗也ト神代ヨリノ道

ト称スルヲナレニ此御文ニテ異論ニ及ハス神代已来ノ  
習俗ニテ韓俗ノ詩語也然ルニ後漢已来三韓ハ西土  
ヲ学ニ此俗絶タルト見ユ

### 詩賦

日本紀ニ詩賦ノ真大津皇子ニ始ルトアレニ実ハ大友  
皇子ヲ始トス統日本紀以下毎々詩ヲ賦セシムルト  
有テ世々其人ニカニス踏歌ハ持統帝ノ朝漢人ノ  
奉レルヲ始トス其後此國ニテ世々踏歌ヲナス其辭ハ  
七言四句或ハ七言八句詩ヲ用ヒ訓ヲ用ス音ヲ以  
歌ヒタリ延暦中輪臺青海ノ人ノ來レルヲ樂ニ作リタリ

其詠六言四句二首五言四句一首コレヲ歌フモ音  
読ニテ訓ヲカラス唐風ヲ以テ韓ノ遺俗ヲ変シ音読  
ニテモ其儀通スル様ニ成タリワカムトウリトイヘハ王家無  
等倫ト云ニテモ知ヘシ和歌ハ神代ヨリノ道トアレトモ  
統日本紀已下ノ史ニ載スル所總ニ數首ノミ花晨月  
タノ宸遊詩ヲ賦スルヲニテ天暦延喜ノ比テモ其餘  
風盛ナリシニ踏歌モ光孝帝ノ比ヨリ歌ヲ用ヒ内宴  
ナトモアトカタモナクナレリ

### 國史

日本紀ヲ讀ハ先此國ノ事ハ馬辰ノニ韓ヨリニラテ

傍弁韓ノモノ相ニキハルト心得ソレヲ心ニ忌レス読サレ  
ハ解シカタレ古来韓ヨリ事起リタルヲ掩タルヲラレ  
ラス此國キリニテ何事モ出来タルト思フ故韓ノ言  
語ヲ和訓トス様ニ説ヲ立終ニ其意ヲ得ルヲナレ  
其上舊事記古事記ハ相違ノ更モアルヘケレバ日本紀  
舍人親王ノ精撰故首尾直筆ニメ一字ノ増減モ十  
ラヌヤウニ覺タルハ大ナルヒカコト也 ○ 神代紀二  
卷異邦ノ書ヲ取集メ雜ニ佛見ヲ以テ結構ス開  
卷第一義ノ古天地未割ニ准淮南子ノ文ヲ用ヒ  
尚書考ノ日神五色明照四方ヲ用テ天照太神ヲ

日神ト称シ光華明彩照徹六合ト書又春秋内事  
ノ日者陽徳之母伝ヨリ女体ノ天照太神ヲ日神  
ト称シ春秋感盛苻ニ人主与日月同明四海合信  
故父天母地兄日婦月伝ヨリ素戔雄尊ノ事ニア  
テ其外盤古血為淮瀆盤古之君身死後毛髮為草  
木盤古死後骨節為山林盤古吹為雷電盤古死後  
左目為日右目為月此等ノ語ヲ以テ文ヲツクリ海  
宮所ハ幽明錄海中有金臺山高百丈結構巧靡窮  
盡神工大志経大意初入海中至金銀城次至黃金  
城次至水晶城次至瑠璃城龍王各與明珠此等ヲ

取集メ結構シタル者ト見ユ○神武紀ニ至リ開  
國ヨリ一百七十九万ニ千四百七十餘歲ト書テ神  
代及上古ノ間ノ年歲ヲ長クス此算數家ニ說ア  
ル事トイヘニコレラヘ事ナリ一說ニ後人ノ加ヘ  
タルモノトイヘニ古本ノ日本紀ニモ皆コレアリ古  
事記ノ序ニ天武帝ノ詔ヲ舉テ云朕聞諸家之所  
齋帝紀及本辭既違正實多加虛偽當今之時不改  
其失未経幾年其旨欲減又姓氏錄序ニ使前姓後  
姓文字斯同蕃俗和俗氏族相疑萬方庶氏陳高貴  
之枝葉三韓蕃賓称日本之神胤時移人易罕知而  
爰ヲトクカ如レ

言天武帝ノ詔此ノ如クミ應神帝ノ所出ヲカクシ大  
友皇子ノ即位ヲ載ス神代紀ニ素戔雄尊ハ辰韓ヨリ  
渡リ玉フ故ニ新羅ヲ父母ノ根ノ國ニリエラ素戔雄尊  
此國ノ御人ナルヲ此邦ヨリ逐ヤラヒテ新羅ノ蘿志摩  
利ノ地ニ在伝ヘリ然レハ三韓蕃賓称日本之神胤ノモ  
此方ヨリ掩ヒカクスニ事ヲコリタルナリ年代ヲモ立々存  
スヘキヲモ削リ文字ヲ種々ニ書改メタルヲ直筆トハ云  
ヘカラス武内宿禰ノ三百十餘歲モ信用レカタシ此等ノ  
事ハ書ラヨム人眼高カラサレハ共ニ談シカタク懸人前ニ  
爰ヲトクカ如レ

日本紀

水鏡

鎌足公傳

德孝 大化元己乙

元

三 二 五 四 三 二 五 四 三 二

白雉元 戊庚

白鳳元

裏書引皇代記  
作白雉者蓋極  
日本紀矣

三 二 子壬 戊庚

白雉元

二 三 四 五 六

五寅 甲

三

元卯 乙

二

二辰 丙

一

三巳 丁

一

四午 戊

一

五未 己

一

六申 庚

一

七酉 辛

一

二亥 戌 壬

一

白鳳

二

元

三

統日本紀神龜元年  
十月詔報曰白鳳以  
來朱雀以前年代云  
遠云云  
光圓卿云按水鏡  
及諸書天武朝朱  
鳥以前有朱雀皆  
鳳之号而日本紀  
無之今此云白鳳  
以未朱雀以前則  
有此二號明矣舍  
人不書之未詳其  
故

○ 衡口發  
 ○ 芳  
 大友天皇水鏡云白  
 鳳十一年正月為良  
 政大臣年廿五十月  
 立為皇太子十二月  
 五日即位○年中行  
 事秘抄云天知是天皇  
 十年正月五日大友  
 皇子始為大政大臣  
 既後為皇子帝  
 位云○武智麻呂傳  
 同日本紀以壬申年  
 為元年

十九	八	七	六	五	四	三	二	一
土	午	巳	辰	卯	寅	丑	子	亥
壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲

武天白鳳雉元  
改元白鳳雉二月廿七日即位三月  
 武天

八	七	六	五	四	三	二	一
庚	己	午	巳	辰	卯	寅	亥

大友天皇水鏡云白  
 鳳十一年正月為良  
 政大臣年廿五十月  
 立為皇太子十二月  
 五日即位○年中行  
 事秘抄云天知是天皇  
 十年正月五日大友  
 皇子始為大政大臣  
 既後為皇子帝  
 位云○武智麻呂傳  
 同日本紀以壬申年  
 為元年

十九	八	七	六	五	四	三	二	一
土	午	巳	辰	卯	寅	丑	子	亥
壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲

武天大友元  
辛未土月三日即位  
 武天大友元  
偽號朱雀  
 武天大友元  
乃樂西京藥師寺東塙擦銘  
檢鑑足公信則可  
稱白鳳廿三年

朱鳥元  
丙午酉  
士三申未癸  
孟酉

大化元

元亥  
丁辰  
五卯  
甲戌  
六辰  
壬寅  
四庚  
己巳  
三子  
戌  
二元  
亥

三元

即位

二

大白風故示

大白風故示

延曆中鮮文

元卯  
八月一日  
即位

大長元

大寶元  
元辛  
丑子  
四酉  
三庚  
二戌  
元酉  
十申  
九乙  
八午  
七巳  
六癸  
五戊  
四巳  
三亥  
二戌  
元酉  
大寶元  
元卯  
即位

大寶元

制度

開闢ノ後上ノ素戔雄尊下ハ大已貴命ヨリ事始リタレハ  
事物言語皆韓俗也○神武帝勃興シ玉テ後モ猶右  
ノ風俗ノニテ○應神帝ノ御宇百濟ヨリ阿直岐王仁ナト  
來リシヨリ文字モ傳リ始テ西土ニ通シ欽明帝御宇百濟  
ヨリ佛教傳リ○推古帝ノ御時ニ上官太子佛ヲタヨリミ  
十七條憲法ヲ作り玉ニ始テ冠位十二階ヲ定メ玉ヘリ上  
下衣服モ備リ裸形モヘヌカレタリ然レニ其文物皆韓俗  
ノ餘風ナル故ニ○孝德帝御宇始テ古風ヲステ、律令ヲ定  
ルシ端ヒラケテコレヲ日本紀ニモ神道ヲ輕ズト書リ○

天智帝御宇終唐ノ制度文物ヲ用テ七百餘年ノ韓風ヲ  
シリソケ其典礼皆後世ノ法トルヘキ基ヲ開カセ玉ヘリサヘ  
萬世ニテモ日本中興ノ王ト稱シ奉ル大友皇子ヨク其御  
志ヲツカセ玉ニ壬申ノ乱ヨリテ天命遂サセ玉ハス天武持  
統二帝御宇ニハ天智帝ノ歟慮モシカくト行レサリシニ○  
文武帝ノ英斷ヲ以大極殿ヲ立テ朝賀等ノ礼ヲ定メ釋奠  
ヲ始メ律令ヲ修シ玉フ實ニ天智帝ノ御志ヲ継玉ト云ヘシ其  
後聖武帝ノ御宇ヨリ政治弛リテ光仁帝御宇始テ復古ヲ  
詣ニ向ヒ○桓武帝再ニ季唐ノ制ニモトツキ飾ルニ漢魏ノ文  
以テシ都城宮城ノ結構帝宅ノ壯麗四夷ヨ鎮伏セシメ玉ヘリ

此時ニ當リ天智文武ニ帝ノ御志全備ストムヘシ其後外ハ浮屠内ニ陰陽巫祝正路ヲ塞キ弘仁已後又桓武帝ノ古制ヲ変改レ玉レヨリ唐ニアラス韓ニアラス又竺ニアラス一種ノ典礼ヲコリ佛法ト神道ト相混レ儒士ハコレカ奴隸トナリテ其弊神國ノ名ヲ主張シ貴賤トナク佛ニ供奉スルヲ惟日不足メ中葉ニ及ヘリ夫レ人ハ一日モ昔ヲ忘ルヘカラス西土ノ書ヲヨミ華夷ヲ分別シ聖賢ノ道ヲシルハ全ク天智文武ニ帝ノ賜モノ也

天明元年辛丑七月

大嘗御中宮御事記

